

近代白石の広告から

明治以降の白石では、地域新聞の発行や、地元の研究者による多くの歴史研究書が出版されてきました。本文の重要性はもちろんですが、そのなかには現在まで続く商店などの広告も掲載されています。



明治45年(1912)広告：料亭玉幸 出典：『刈田郡案内』



明治43年(1910)寿丸合名会社移転記念 出典：渡辺家文書



明治45年(1912)広告：寿丸合名会社 出典：『刈田郡案内』



明治45年(1912)広告：相川本店 出典：『刈田郡案内』



昭和25年(1950)広告：白石劇場 出典：『刈田郡詳鑑』



昭和25年(1950)広告：岡崎ホテル 出典：『刈田郡詳鑑』

白石市制施行 70 周年記念企画展パンフレット

古文書が語る 白石の町と村

―地域をつくる先人たち―

発行日 令和6年(2024)10月4日

編集 東北大学東北アジア研究センター上巻歴史資料科学研究部門

発行 白石市教育委員会

本誌は、白石城歴史探訪ミュージアム2階展示室で

令和6年(2024)10月4日から12月22日の期間に開催した記念企画展のパンフレットです。

今回の企画展「古文書が語る白石の町と村―地域をつくる先人たち―」は、昭和29年(1954)に白石市が誕生し、70周年を迎えたことから開催いたしました。蔵王山麓の豊かな自然を背景に、先人たちはさまざまな創意工夫によって「生きる術」を育み、現代に暮らす私たちに多くの英知を伝えてくれました。その詳細な歴史的経過は、白石に住む人びとの手によって調査・研究されてきたこともあわせてご紹介できればと思います。



江戸時代から白石市の誕生

白石市域は、古代から政治・経済の要衝として数々の歴史を残しています。今回の展示では、おもに江戸・明治時代の歴史資料をもとに構成しました。

慶長7年(1602)12月、片倉小十郎景綱は、主君伊達政宗より白石城およびその周辺村落を拝領します。知行地は刈田郡内の1,300貫文(13,000石)でしたが、その後の検地や新田開発、知行地加増によって文化9年(1812)には1,869貫390文となりました。現在の白石市域はおおむね片倉氏の知行地となっていますが、犬卒都婆・内親・津田の3か村は石川氏(角田)などの知行地、小奥村の大半は蔵入地(仙台藩の直轄地)でした。

近現代の変遷：白石市成立をたどる

和 暦	西 暦	月 日	事 項
明治 元	1868	12月 8日	刈田郡は岩代国に編入(翌年12月に磐城国)
明治 2	1869	8月 7日	白石県の設置
		12月 9日	白石県を廃止し、角田県となる
明治 4	1871	11月 2日	角田県を廃止し、仙台県に編入
明治 5	1872	1月 8日	仙台県を宮城県に改称
明治 9	1876	5月 1日	刈田郡は磐前県管轄となる(同年8月に宮城県復帰)
明治 11	1878	10月 21日	郡区町村編制法施行、刈田郡発足(柴田刈田郡役所が柴田郡大河原村に設置)
明治 22	1889	4月 1日	町村制施行、(現在の白石市域)：白石町・福岡村・白川村・大鷹沢村・大平村・斎川村・越河村・小原村の1町7村が成立
明治 27	1894	4月 1日	郡制施行、刈田郡の独立で白石町桜小路に郡役所設置(現在、白石市役所の所在地)
大正 15	1926	7月 1日	郡制廃止、刈田郡役所閉鎖
昭和 29	1954	4月 1日	市制施行、1町6村の合併で白石市が発足
昭和 32	1957	3月 31日	小原村を編入、現在の白石市域となる

出典：『白石市史1 通史篇』『白石市史年表』(1979年)

戊辰戦争後、現在の白石市域を含む刈田郡は陸奥国から岩代国へ編入されました。そして白石県の設置などを経て宮城県に落ち着くのは明治9年(1876)のことです。明治時代における大きな画期は、明治22年(1889)の町村制施行でしょう。このとき、白石市域は1か町・7か村で構成されました。また、その5年後には柴田刈田郡役所より刈田郡役所が独立しています。

昭和29年(1954)の白石市誕生と、その3年後に小原村が加わることで現在の白石市ができあがりました。

行政区画の変化：江戸時代から明治22年の町村制施行まで

江戸時代	明治22年(1889)	江戸時代	明治22年(1889)
白石本郷	→ 白石町	大町村	→ 大鷹沢村
郡山村		三沢村	
鷹巣村(里前)		鷹巣村(山内)	
蔵本村	→ 福岡村	坂谷村	→ 大平村
長袋村		中目村	
深谷村		森合村	
八宮村		斎川村	斎川村
津田村	→ 白川村	越河村	→ 越河村
犬卒都婆村		五賀村	
内親村		平村	
小奥村		小原村	小原村
小下倉村			

出典：『白石市史1 通史篇』

人口の推移

現在の市域を江戸時代から振り返って人口の統計をみていきましょう。江戸時代における詳細な人口は不明なところもありますが、中期の安永年間には7,223人という数字がわかります。明治時代に入ると、2万人を超える人びとが暮らし、大正元年(1912)には3万人を突破します。白石市誕生後の昭和32年(1957)には45,411人(小原村合併直後)となりました。この変遷は、日本全国の傾向とほぼ一致しています。

白石市域の人口

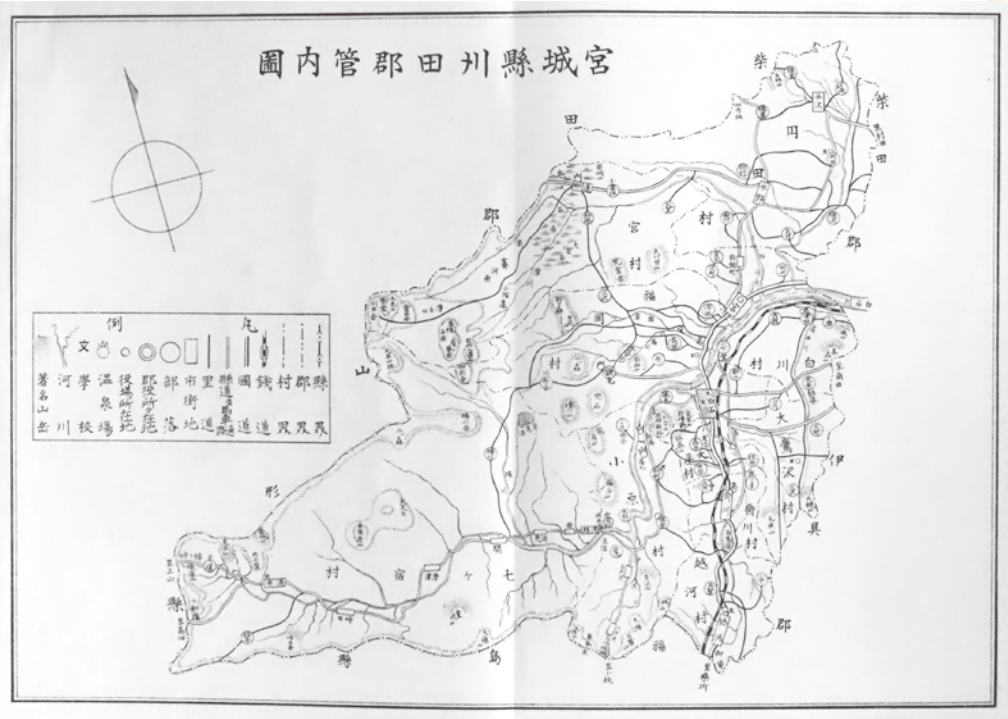
時 期	人 口
安永年間(1772～1781)	7,223人
明治25年(1892)	24,985人
明治43年(1910)	29,965人
大正元年(1912)	31,181人
昭和32年(1957)	45,411人
昭和52年(1977)	41,320人
平成9年(1997)	41,672人
令和6年(2024)	30,761人

出典：『白石市史1 通史篇』『白石市史年表』
「年表白石市50年のあゆみ」「白石市ホームページ」

地域の特徴：江戸時代以降の白石

- 城下町から商業都市への変化
- 交通の要衝：奥州道中(街道)・山中七ヶ宿街道など → 鉄道 → 高速道路・新幹線
- 和紙、温麺をはじめとする特産品
- 豊富な農産物
- 温泉やレジャー施設

明治20年(1887)に東北本線が開業<図面右側>したあとで、主要道路・河川・地名・役場・学校などが記されています。



明治45年宮城県刈田郡管内図 出典：『刈田郡案内』

